志能兒

911.3
シ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

文稚雅指のしるべ
あかき集もさらに
よしゆゑ出し先なる
あつめられハ中頃の傳る

夏ふしのめ
見るし
雪のま

天行雪
時年七十有七

名月に洲先の料理着たてや　等栽

落ま羽織ゑとられ吹なか　文禮

未咲の桔梗尾花に秋深き　富水

岨傳ひ乗る馬歸る月　栽

案内者の玉よ日さし延やうに　禮

鴫して釜をつゝ口切　水

[illegible]

祇園もからぬ非番は肩休め
舟と車の数ならぬ
云んくと海道筋のかまへて
車ねはなれ大工尻目了
日盛ありは於ても流るき汗水ぬるし
魚でありて操る何鰹
世にあらぬ弟子と縁ん乃下心
誰か尋ねよ庵なよい月

砧うつ懐へ草ぶ煮てわくり
鶉なきもよふき鳥ふるも
息のうて志りくもくふ花蕾
花海の清水に猪口を浮ま
菓子を添えてゆかしき出商ひ
浴幕衣む羨綿をぬくらん
植木枝たれすら極老てくれ
庭木をまぐふ退屈をせん

裁 禮 水 禮 裁 水 禮

水 裁 禮 水 裁 水 禮 裁

梅干す時當になりしの人　水
さてもすゝしや祇王寺　禮
嵯峨に住て見つまハ川東　栽
渉沼乃浅はのまてと書き　禮
物好に身を隠は果し秋の雪　水
かるさあり秋し翠扇打や不　栽
月讀の祠いとも屋森深　水
垣のきはしくに穂らさる柿　禮

落武者の幟悔はきけ可忠きり　栽
又溜飲はむゆ法いと末なる　水
以建に障子のきしる雨つゝ来　禮
若句は禮も見へつゝふすむ　栽
うつろふ手補ふむの咲かけて　水
古活ら乃さむる春乃道の記　禮

竹の子や次第はけしも伸拾ひ　西京 拾山

鶯は那摩にならぬ夜の音　碩水

葉ゝゐるうちはなるらし蓮乃花　百可

日すゝまて遅き夜の心移り鳥　雨村

秋蝶や霧て来るゝに出ぬ際　連梅

皆咲ては外へ筆達し外さくら　稲露

うつゝにも春乃こゝろや梅の花　九岳

芳場花や雨もつよに咲々家　大坂 犁春

奥床し梅に輪弾の飾り松　潮水

人参の粉も燃して榾火哉　杜鴻

葉は数も算ふるほとや陽り花　芦村

さらくと咲日も昇丹や村の風　春門

燈籠の麻に取合ふ椿かな　朝逸

砂山や小松交りに梅乃花　南歌

一人は居りつるもかしまし墓　流巷

せはまく床まで降や月と雪　神戸　卓志

波たゝぬ海見て眠し小春空　伊勢　五鈴

やちくさに咲揃ひけりけしの花　果樵

絲むしやまちて居月に人通り　玩月

実おとしも知らぬ子猿や栗の花　波吉

咲くさぬ梅や径乃うら表　尾張　ち紀

門雪や待ぬ春ぶりの雪一日　徂康

云秋葉に花咲まはやひとり人　松翠

ぬるてふの聞のむかりもれ鳥　可洗

出嫌ひの婦てや蓑に置火燵　禾啓

さりかゝてあまさし障子ぬちらく日　素陽

咲花や暁鼓の松もし涼き　三楓

秋の海も早しく又出てさし秋亭　車友

花つ蝶とめる眠つきや又ひとつ　梅洲

鍬たし綾ぬるさ秋ふや畑講　荷庵

畑耕してまつ一叢霞置白やおもしろし　裸鶴

明ほのや若成まつ一藤黒雲　英齋

うりかへやちらす年の名ある流かな　酔雨

よは浪に枕定てや漂鳥　三河　蓬宇

つむ人の声もやさしき若菜哉　百嶺

萍や風にもまれし花の向　翠隠

冬牡丹あふもちらるゝのほかに露　李川

柴の戸乃垣うちもちる木の葉哉　素鱗

鶯はおらぬ迄みぐらの眠る山　石芝

捏哉捨て雀ちるらり初時雨　遠江　禱村

白雲の又其うへ乃出たりけれ　守孝

夜の明てからも趣有や梅乃花　洋々

初鳴や未よはけの文も先がらも　知碩

庭は上ちらし哉退くに時雨雲　竹華

見よよ寄りゝに撫る柳の形　平臺

厚なまゝ漂ふある日影哉　木潤

卯の花や斯まで冷る夜もなる　甘谷

ちる時は雲にも似てかゝる　烋園

初鮭や料理数多に染も好る　清民

葛の葉のうらからも立黄葉哉　三奏

影ゝ翌山路もしる冬哉　十湖

鶴鳴てあとの秋なし蓬莱園　駿河 蝸堂

山蔭は居りころや稲むしろ　穂堂

撫子や古鉢に置て水瓶　忠ふき

見移すや花の影もひと木哉　拙叟

逢に来て連て出よかしうかれ猫　巴丈

降も苦にならぬ旅寝や春の雨　又拙

よし渡聞つれて酒や郭公　青溪

咲かゝる日やきのふはねぬ所様か　九成

郭公も聞よ行るさくら哉　うつ女

起て向ふ雀に浮る湯波女が雛　成叟

枝ふりもやさしき嘘の柳かな　乙彦

十團子霧の流るゝ梢くの郷　知来
よい空にひとり住まそ冬の月　（甲斐）草國
若水と思へば深し茶の薫り　白隣
よそり取て見たき紫重き一葉哉　左岳
黒きものこれ人らしや遠柳　雷石
晴りやまて消えぬまゝ川の影　隻口
下わろくも菫咲たり段ゝら　竹良
春雨や濡るゝかたなき人の古傘　香芸

一日に降りて大雨の村雨かれ　半拙
ひとり暮やちらて海の高くなる　（伊豆）寸松
蕣や多以蕾数も見るたよりに　連水
清ひとゝに隠寛成る枯野哉　（相模）閑茶
又雨り又る烏もいちりたへ給　雪蕉
太箸や筆より重き掛ら繪　保山
夕あけやむしのみとの廷風ちる　魯石
蔦紅葉小体ゝ淋し出より旅　南窓

立て待榾の下り萱一つ雨　美濃　藍庭

ひらめとも小松野まてや足りぬ花　竹茁

花野見にすまし人のよ幾日暮哉　南陽

陽炎や流れても行艸の上　信濃　月窓

飛鳥も急く日暮哉浮雲多　省我

たつ霧やなとも明くて帝里　不残

いつ迄もなりきらぬ顔の苗　松屋

名月や燃まて末さる稲の雨　伏亀

野に氣の門ありて行蓮乃花　其残

花にゑひて色あ見る也藤袴　月盛

郭公綠あるに人とてなれ日の始　松溪

暮かれ後螢のちらよひとつ平　採花女

さそわれまし落ちるは柳かれ　木甫

低ふまて届く風あり菫艸　静美

ひやゝかや音や菊の節穴　對山

萩櫻にするよ十分見て帰り　意藩

常盤木の中に目立つや梅もどき　一枝

晴きりて此の花盛りよき月見かな　千瓢

濁らぬを多摩の流よ皐月雨　國山

旅こゝろ後藤めく重ね夕の都　樂二

蝸牛や角になるに似ぬ風雅かな　一羊

耳にうつ時雨はきはれ牡丹かな　万山

康と秋乃魚覗きなりさの入　希翠

蚯蚓やひゞく橋乃くもの車　堆山

盃に雫る汁や沖膾　竹童

降せずに秋しぐる河の水の垂　一秀

山茶花やさかりにてさき桐乃苗　玉葉

浮舟寄すや名月の軒近し　重山

寝ておもむや月になる雲の虫かな　若老

山茶花の日かげちるや垣乃際　笙月

ちひさいる又梅の干蟹の味　楓光

鞦韆や清もりに雨の花の葉　上毛 棄古

美しう物くるきてありぬ　萬古

うらけさき春や蝶の眼重なふ二　光同

たてゝ居る猿の尻まで萩の露　爲流

借る笛の近江知まて川ゝ千　下毛　茂精

雪月花抱えて郭乃牡丹かれ　如川

好ましき住ひ乃向ふ梅の花　言海

西よ出て入るをいはうれしき月　盤城　此山

梅咲や常あまた用ある向ふ峠　扇可

湖乃明りほのめえて春の雨　宝龜

伊吹見えて居乃末も花盛らし　春濤

十か十よく来るけれど五万米哉　無徹

子編みしをや美事よそもまた若新　寄柳

秋も春に花のあまりくるなき音　岩代　儀鯽

好ぶ筆もき残れて秋の暮　晴遊

風なくも湖深にまるや橋乃上　八束

蓑虫乃ゝの雫や去る所　壮山

船出する船の曠がりさくら鯛　桒五

まつ残る軒の宵や春の月　花交女

畑にもおさぬ森の柳かな　一洒

ところゝ迄明て入りかゝる庵　蓮阿

宮の時も子供勝なり生身魂　鯉住

水音の伊勢参りも明て其近し　帰童

ゆるさぬいつらい梅咲く山路かな　陸前　青宜

筋違ひに柳ならびや鼻月時　甫山

中ありて松のこほす宵まち哉　陸中　沙山

上流風の立や芽明輪の行すゑ　芳洲

雪の宿あつまり明る夕ともし　盛虬

梅咲て皆上ゆるんだの春　素更

畑ならし柴戸もゆり帰れ跡　陸奥　有川

菜の花やまた明け行のあまり　露垂

雲の松や馬に乗れて戻る道　徳風

明さし山あけての後取り更衣　羽前　可有

峠から見おろす町や戸は數　陽山

雨すゝるや片野ハてりて風かをる　智芳

なつ風を追つめみゆく川の端　月山

花もまつ日くれのふ瓜や蛛は風　素山

芦すゝも咲いそ折て庵の毒　也壯

末は霜から秋乃野乃地もふ鳥　湖尹

あさからぬ縁えゐすまゐ夏衣　羽後　朴齋

雅文より嬉し旅籠は河やの風呂　月静

花の色や誘はれ人は待てはれ　二葉

まつりみえる姫舟日さかりの山櫻　掬水

あらぬ竹にも隔てつれ梅柳　鳳壽

菜は花や入日は霞つゝ山もなし　雪川

若葉にもゆるや上野の夕鐘起　弄山

旅に居て旅はわすれた杜丹哉　鶴皐

さらく小篠ききぬる何の秋哉　尾光

初降の晴間きらつく雫哉　帰樂

蝶のまふ日向もありて蕎乃花　唫風

うつかりと出て畠ぬれる霜　加賀　雪袋

掬ひ得て掬ふまでの清水かな　木圭

都知らぬ後も泊りや蚊帳隣　文麗

垂井から帰るか掃書かれぬかな　越前　雪主

初雪やちらりと降て挽るらん　越中　其諺

夕立や降口半分砂河原　布尺

鶯や音こもりして雑木山　嵐布

手もかと日なた安し帰りもし　適我

油断して菜を隠されぬ辻櫻　越後　雪潮

赤き梅や春盛法の思ひより　茶遊

伸具や蛙の声や祝ひ事　青曉

弱るや手にもふれる松露　琴丸

まひとつ静なる杜若かれ　蕉影

立出ても連の出来る昼の月　文之

見渡しに気ぬ末も暮て夕柳　梅岡

眠るまき大根畠乃小春かな　雲臺

初冬や蹄く野川も水の澄　旭扇

帰牛やいつ月て出まふり見え短角　金女

まつ梅や寒く葉さゝかき色の濃く　蓮麿呂

明るく枝も川て卵の毛へつゝかし　百汲

若水やまつ物ゝ音も清き内　晴雲

出る月見えて夢の世の鐘のちる櫻　佐渡 介刪

蓮の葉やおし下界の鶯掃除　遠蘆

皆舟も泊り支度の蚊遣哉　収之

ころころ日乃廻る也垣の葛の花　江刺 一昕

ともし火に手を及に暖かな餅むしろ　後志 對几

掃よせて蝉扇子も庭の蝶　二休

分かれ行けは山乃端つむ霧かな　應井

安き安し屠蘇も雑煮も呼迄先　不争

加茂川や渦らずくまもなかれ　札幌 洋雲

葉に居る蝸牛峰作る　胆振 鳥牙

夏山やふところ広き人たち哉　應波

鶯や姿に隣て来る雲雀　石見 静雄

音もなく秋の来りし草の雨　備前 松霧

櫻の色も常ならぬとしの春　鶴影

ありしと社の見へてかくすし　よし彦

青梅や磨の舟の出ところ　備後 翠影

夏来て月さしのほる紙帳哉　曉雨

名は猛てよ花も咲ぬ鬼薊　雨川

盃にちや用のなかきて付しも　曉蛙

若艸や草りとあつまる一草帯　安藝 由池

玉井に見え清水の影乱れ　知拙

一鉤観ゆあふさきかぬ燕子花　長門 梅宿

四つの家も懐のあるなる社猫　伊豫 南洋

物惜ふたとへは流れて名乃川　土佐 五菖

落栗や明きて枝のこの人あ对　玄默

花待や皆の隣日なかて待哉　松塘

磯山乃奥を知までなり藤咲む　仲樹

馬てけり人追らしむ幟かな　前閑

家秋の人も見へぬよ月乃門　讃岐　真海

梅の花と名へ睦あさりし春かな　梅晴

只ひと木ある梅咲けり出羅手　阿波　竟年

梅ゐし雪残こりて垣の雪　雪野

こゝろへす雲もと春乃表の風　抱清

片里やかやけねまちへの霞　宇雀

雪消てゑもさゝれは嬉しく福寿草　白史

葬しよめくの心安し鉢うく逃　淡路　周策

常まかにも次いで朝や梅めき　魁香

朝月を梅ひもの毎乃花　藍溪

ちうみ葉人めも芽も祇よ有り　豊後　乙人

秋来ても白帆も見えて夏乃月　肥前　西洲

水鳥の音夢ゆく秋明哉　日向　流危

起よやで鳴鶯乳錦乃図　鳳栖

枯蘆やこなたかなたの水の音　紀伊　淇水

乗てすてし舟に寐て居す春の月　芹丈

蕣つね一生や月をみての秋　雲水　舜仙

手枕や翠に嬉しき塘の邊り　朴因

潮みちて計りても秋の雲　幻夢

清水呑にして暮しや名草山　誂生

名残りて海濱もめてたし福壽草　十水

鶯や初音に枝もきめし哉　文禮

ほのくゝに翫ぶ庭の凍鶴　默平

木地塘縁の須人も若やさて　春湖

むしろ車哉志はし待すは　禮

月影のさしにも暮しゝのかな　平

の本の葉秋よくいる文菊　湖

山寺乃土筆はうは市むくき　禮

追はるゝ中も世話も格子お　平

茶も厭ふ離縁の咄を元乃坐に　湖

渺くとくみも逢ましを　禮

天秤ふり捨ていふ糠の俵直し　平

高い浅みなれ家乃骨組　湖

むけくし月の出汐は置巨燵　禮

阿漕乃浦も千鳥々よ　平

古塚を吊ふ水乃むく柄杓　湖

耳うつふまて訛り啼とは　禮

花まであき見せむ料理喰　平

継子もこゝの春の秋夕桐　湖

嘘ふ匠し家遣ふ市の操様　禮

擂鉢焼て継色紙き富　湖

いふ通り母屋よりきに世を道遣　平

鼻は法いても鯛も子おもれ　禮

居つゞけ宿は出船の何日迄　　湖

いもふとかりゐれ付智恵　　平

迂深は踏まぬ黴雨乃ぬかり道　　禮

紫陽花もさくら梅の辻子　　湖

住なれて五尺にたらぬ庵なから　　平

さびしく留守番しても置道まれ　　禮

見飽たる先に扣への居待月　　湖

野山乃ゆし抱京迄乃頃　　平

若殿のしに随ふ禄はおれ京に　　禮

二十から順にそふの出世内　　湖

茅屋ひとつふき町筋は静之　　平

朝霧起よふ聴ふるゝ鶏　　禮

岩もかしこ楽も風にたつ川桜　　湖

篁乃子のもとに摘艸は説　　平

武藏

あら虹や今は上れる東山　可尊

破れ垣すゝめかや菊のたか香　夢外

下闇や水は下行薄さむし　白左

雨ふれふも果して出し都鳥　喜山

常に水ぬる身は書ぬや菜喰　武正

暮れ秋の唄てある行り雨乃中　鮮露

淡紺乃赤さや串はひらつさし　楓霜

掃除すゞ鞍掛けよ行は墨　曾木

花は名の名て色に初茄子　梦覺

音めりから渡る行く桔梗けふ　春友

松島や眼に体むき尾花薫　酉山

添ふ雲ハ常、行く月曇る丈てかな　文種

鹿の声も明るし行く日乃始　鶯窠

渉りや新ひ毎夕ふ秀よう　雲外

暮乃日や川の方あまふ滝の音　幻史

紅白やおひ切ハ拍調子やり　有抑

春立や袖ハ日和のうち心　茂翠

逝水は路に流れて去ぬ水　文友

鶯によき遠音や里は時鳥　苓峰

庵守は買物らしや梅柳　左助坊

蔭涼しやれて船も浮る木立　木冠

出る月ようつゝて立や峯の庵　亀遊

年の尾や汲せりしほの振きまゝ　林華

暮の山生簾捨て行けにゐま　友昇

桐畑も春に後れて来るはせ　扂杉

すゝしさや蝉ひとつ居ぬ青畳　梅后

蔦墨に雲あらはるゝ雨や降ル　梅友

秋もまた若葉よ蓮の花は遠　其峰

さの有りき雲よ家やものゝ山　青坡

退居たるゝて秋まつ日和哉　凉坪

裾村は萩葉おろし吹夕の雨　東京　二洲

宮の森へあらはれにけり巨燵哉　謳尭齋

身にしむや灯ともしころの秋の風　等裁

曙やさま川雨は切れ行り　梅年

書物や押えともあまる扇かな　精哉

あらましの呼時凧は明に見ず　幹雄

珍しき秋やわか葉の木の間より　永機

吹まゝに露もしめりぬたもと哉　澄江

朏や降しる啼哉垣根まし　松雄

芋の葉につゆ溜めて蛍かれ　默平

初日影ものうち見えし寒氷　尋香

又雨のあけて退て月ひと秋　花朝女

鞭鳴や抱えふれつる袖袂　千畝

芋や木の影置てたかり初月秋　有彦

たけなはに手打も止めぬ帰りむ　菊雄

うらかれやふ下りせて鶴の夕かな　山月

森流まて瀬越鳴行小鴨哉　精之

樸剥の支もとつまて呼子鳥　桂花

芋狩子もらかまへ河原鞍月秋の風　空狂

冬はり風の音も飾満し乃も　詩竹

葛飾や秋まさしあれ浅茅花菖蒲　艸山

冬立ちぬよ限て来まつり田子の浦　鴬笠

嶋と起て風能おす秋さくれ　金羅

た可宇や寿いへ一はし包　友輔

脱捨め着る錦まても落羽織　芳律

茶の色や流石さうても物静　竹舎

蝉乃声瀧音あさく峠よ高り　三子守

幾度の時雨にふりぬ檜笠　霞江

岩碑く手元哉近き夕日ら菊　秀子

色に扇押まへて隅田はあゆくかれ　静和

夕顔や月影もあり風もあり　晩香

下戸ありに盃うけて屠蘇きけん　ぬ升

移植の牡丹やさしき畑の通り　魚里

鶯も留守預りし其日より桜　聴杏

鶯や時も遠ざれ縁の安喰こつる

芙蓉や垣ともに清く咲こゝ迄　碧海

よい物を何ゝ姫名あし秋負桜　完哉

鶏良ふ事見世市林埃りふ　素石

降雨や閑ゝやすて城小半日　大髙

何事も置て吟なおれ哉　吐水

うき旅に世をうつきやすの月　連舟

山土の味ひはく中る菜茸哉　太年

夕立や雨や一吹起す風　成雅

赤いのを取ゝてはいふ萩の花　芳泉

幾ちよれ不との何り山の月　予雲

根こゝまて菫く成華ハ菜花　素水

稗までも丈ならぬ穂や稗の中　宇山

おくなりた硯みる紅葉哉　良大

秋立た眼につくものよ石二ツ山　連々

葉に静もれす花の数　呉仙

山藤やこれも未のに咲かゝり　竹夫

萱やはりみとめる喰たらひ　花佐

娘よれ咲むるや初鵑の羽音　梅溪

眼先みよ櫻朝出花の雲　春湖

萩よりも節をつらし秋海棠　富水

ゆふやや秋の往来は眼にも湧　文禮

豊山居

明治十四年八月

國學院大學圖書
第6392号
受入
昭36.3.14

金莖舍藏梓